

選ばれるデイ の条件と実際の取り組み

700軒以上の事業所を見学してきた
経験則から解説!

介護ぶらす 代表者/介護コーディネーター

山川 仁



1979年北九州市生まれ。2004年に訪問介護事業所の新規立ち上げを行い、管理者として勤務。その中でホームヘルパーの派遣だけでなく、老人ホーム選びで悩んでいる家族（介護者）の相談も多数受ける。そこで北九州市内の介護施設700軒以上の見学を実施。その後、2011年に在宅の介護サービスの導入から老人ホーム探しまで幅広く対応できる相談窓口「介護ぶらす」を開設。そして2017年7月には、電子書籍「老人ホームは本当に現代版「おばすて山」なのか?」「親を老人ホームに入れるのはまだ早い?」を出版。現在に至る。

多世代交流で利用者に生きがいを見つけてもらう通所施設の取り組み

● 2018年度の 介護報酬改定を見据えて

2018年度の介護報酬改定では、「共生型サービス」が創設されることになっています。このサービスが創設されることにより、同一のデイサービスで一体的に介護保険と障害福祉のサービスを提供することができるようになります。共生型サービスで最も注目されているのは、「高齢者と障害者が同一の事業所でデイサービスを利用できる」ということです。ただ、これはあくまでも介護保険制度上で利用が可能になるということで、現在でも共生型サービスと呼べるような活動をしている事業所は存在しています。

その中で、今回は独自の共生型サービスを提供している事業所を紹介したいと思います。取材にご協力いただいたのは、北九州市小倉南区にある「デイサービスセンターひより」を運営している「株式会社pupa project（ピューパープロジェクト）」の代表取締役である江崎由佳氏です。現在、江崎氏が行っている共生型サービスとはどのような内容なのか？今回は、その内容を聞かせていただきました。

インタビュー

株式会社pupa project
代表取締役 江崎由佳氏

◎ 江崎氏が介護の仕事を始めた理由を教えてください。

▲ 私は子どものころから両祖父母に囲まれて育ったのですが、その環境が介護の仕事を始める大きなきっかけになったと思います。

当時は二世帯住宅で父方の祖父母と同居しており、母方の祖父母も歩いて行ける距離で暮らしていました。

私の両親は自営業を営んでいましたが、仕事と家事で忙しそうにしていたので、私はいつも2人の祖母と日中を過ごしていました。学校が終わったらそのまま祖母のところへ行き、一緒にたこ焼きを作ったり、折り紙を教してもらったりして、毎日が本当に楽しかったです。

もともと人懐っこい性格でしたが、一日の大半を祖父母と過ごすような環境で育ったため、近所のおじいちゃんやおばあちゃんとお話することにも抵抗はありませんで

代表取締役の
江崎由佳氏



した。こうしたことから、母親からも介護や医療関係の仕事に就くことを勧められ、私自身も介護の仕事に魅力を感じていたので、高校を卒業した後に早速ホームヘルパー2級（現：介護職員初任者研修）の資格を取得しました。

一番初めに就いた仕事が、訪問入浴の介護スタッフです。その後、いろいろなご縁から訪問介護の仕事やデイサービスの立ち上げなどにも携わらせていただきました。ホームヘルパーの仕事では、まだ20代前半だったこともあり、認知症の人の周辺症状にはどのような対応をしてよいのか分からずに戸惑うこともたくさんありました。そのため、当時は「ホームヘルパーの仕事なんて2度としたくない…」と思っていましたが、起業して初めに行ったのは訪問介護事業です。人生って本当に分からないものですね（笑）。

Q 江崎氏がデイサービスを始めた理由を教えてください。

A いろいろなきっかけがあって訪問介護事業を始めたのですが、もともとはデイサービスの仕事がしたいと考えていました。なぜかと言うと、私は幼少期に祖父母がお世話になっていたデイサービスによく遊びに行っていたのですが、私自身もその施設のスタッフによくしていただいたからです。その経験が「将来はデイサービスで働きたい」という思いにつながりました。

とは言え、先ほどもお話したとおり、起業前にデイサービスの立ち上げにもかわらせていただいたのですが、その時は仕事と子育ての両立がうまくできずに退職することになってしまいました。子育てが落ち着いた後、別の訪問介護事業所の管理者として働くことになりましたが、「デイ

サービスで働きたい」という思いが変わることはありませんでした。そのため、勤めていた職場の代表者と話し合い、デイサービス開設に向けて動き出すことになったのです。

私が当初から考えていたデイサービスのコンセプトは、「多世代交流（高齢者と子どもが日常的にふれあうこと）ができる施設」です。このようなデイサービスを開設するため、小学校時代にお世話になった担任の先生や近隣の幼稚園などに私の思いを伝え、まずは協力してくださる人を探しました。そうした中、無事に候補先の建物が見つかり、実際に役所の担当者に現地調査のお願いをしました。しかし、現地調査でチェックを受けたところ、指定を取るために必要なリフォーム代や設備代に莫大な費用がかかってしまうということが分かり、出店には至りませんでした。再び開設予定地を探すことになり、いろいろと探し回っているうちに、知り合いから「江崎さんと同じ思いを持っている人がいるから紹介するよ」と声をかけていただき、再びチャンスが巡ってきたのです。

紹介していただいたのは、「幼稚園」「学童保育」「保育園」などを運営している学校法人神理学園の理事長である巫部^{かなぎべきちひこ}祐彦氏でした。早速、巫部氏が運営している幼稚園に伺いました。出会ってすぐに意気投合し、話題の中心は「幼稚園とデイサービスがどのように連携していくか」という内容になりました。普通は初対面なので、時間をかけて互いの意向を確認する必要があるかもしれませんが、これまでの経験から「絶対にこの人だ！」と感じましたし、巫部氏にもそのように感じていただいたのではないかと思います。



毎日のように子どもとのふれあいがあります



園児たちと一緒に“間違い探し”



流しそうめんでは園児たちが利用者の麺も取ってくれます

このコンセプトを実現するためには、同じ思いを持つ人と足並みを揃えて事業所を運営していくことが最も大切です。珍しいコンセプトだからということで始めても、同じ思いで事業が続けられなければ意味がないのです。このコンセプトに共感してくださる人を見つけるため、私はいろいろな人と会ってきました。その中で、共感してくれる人はたくさんいましたが、「一緒に実現させる」という話まで進展したのは巫部氏だけでした。やはり諦めずに行動を重ねていくことで、目標を達成できるのではないのでしょうか。今回の経験で改めてそう感じました。

Q デイサービスセンターひよりの特徴を教えてください。

A 弊社の特徴としては、まず「幼稚園や保育園と同じ敷地内にデイサービスがある」ということです。同一敷地内の併設事業所としては北九州市初ということで、新聞にも取り上げていただきました。

開設当時も高齢者と子どもがふれあうことができるデイサービスであれば、弊社以外にもたくさん存在していました。例えば、敬老の日に幼稚園や保育園の園児がデイサービスの利用者に歌や踊りを披露するのは決して珍しいことではありません。ただ、このような機会は年に数回しか持てな

いのが現状です。そうすると、利用者子どもがコミュニケーションをとる時間は限られてきます。また、子どもとふれあうイベントがあったとしても、利用日と重ならなければイベントに参加することは難しくなります。その結果、年に一度も子どもとふれあうことができない利用者も存在するのです。

しかし、弊社ではこうした問題が発生しません。なぜなら、幼稚園と同じ敷地内にデイサービスがあるので、利用者は確実に園児たちとふれあうことができるからです。毎日ふれあう機会があるので、人間関係も少しずつ構築されていきます。そのため、互いが自然体で過ごせるようになるのです。毎朝、園児が「おばあちゃん、おはよう！」と元気よくデイサービスにあいさつに来たり、手をつないで運動場を一緒に散歩したりしています。

このような行動は、幼稚園の先生が園児にお願いしているわけではありません。園児が自発的に行っていることです。私が実現したかったのは、このような環境でした。現在は核家族化の進行により、高齢者と子どもが接する機会はどんどん少なくなっています。また、仕事や結婚を機に親子の住む場所が離れてしまうケースも増えてきました。このような状況では子どもと

ふれあう機会も減る一方です。こうしたことから、デイサービスと幼稚園を同一敷地内で運営することを思いつきました。ずっと子どもと一緒に過ごせるわけではありませんが、同じ敷地内にそれぞれの施設があるということで互いの行き来が負担にならないのです。こうした環境づくりが多世代交流の鍵になると考えていました。

しかし、私は介護事業のプロであっても、保育事業のプロではありません。同じ大切な人の命を預かる仕事ではありますが、思いだけで事業を始めるわけにはいきません。このようなことから、幼稚園や保育園を運営している事業所と連携することが必須でした。

デイサービスを始めて感じるのは、「利用者が本当に楽しく過ごしてくれている」ということです。一般的に、デイサービスではどうしても利用者はお世話になることばかりになってしまうので、肩身の狭い思いをされているのではないのでしょうか。このような状況を打開してくれるのが幼稚園の園児たちです。利用者が園児に昔の遊びや勉強などを教える機会もあるのですが、そのような時は利用者の表情も生き生きしています。そして、園児も目を輝かせながら話を聞いています。その姿勢は話している利用者にも伝わるものです。やはり、要介護認定を受けている高齢者も誰かの役に立ちたいという思いは持っているのです。

実際、多世代交流の良さを感じているのはデイサービスで働いている私たちだけではありません。幼稚園の先生からも「園児が上手にあいさつできるようになった」「思いやりのある子に育っている」というような声をいただくこともあります。私自身も高齢者や子どもとのふれあいを通し

て、ささいなことでも感謝できるようになりましたし、弊社スタッフも同じように感じてくれているのではないかと思います。

Q 多世代交流の環境を整える上での注意点などを教えてください。

A 北九州市初の取り組みではありましたが、「他社と違ったことをしよう」と思って始めたわけではありません。至ってシンプルに「高齢者と子どもが自然体で過ごせる環境をつくりたい」と思ってデイサービスを開設しました。

こうしたコンセプトのデイサービスを開設するに当たって重要だと思っていたことは、「多世代交流の必要性を感じている人と連携する」ということでした。たとえば、どんなに私たちが多世代交流に対する思いがあったとしても、連携する幼稚園がその必要性を感じていなければ、良好な関係は長続きしません。ですので、自社で幼稚園や保育園を運営する場合でも他社と連携する場合でも、多世代交流に対する思いは共有しておかなければならないのです。

また、デイサービスを開設する場所の地域性も調べておく必要があります。なぜなら、連携する事業所が同じ思いでも、利用者の家族や園児の親が多世代交流の必要性を感じてくれなければ実現できない可能性もあるからです。利用者の中には、感染症や転倒のリスクなどを気にされる人もいます。園児の親も「高齢者にけがをさせてしまうのではないか？」ということを気にされる人もいます。もちろん、こうしたリスクについては互いの事業所の取り組みで未然に防ぐことはできます。とはいえ、せっかくでしたら利用者の家族や園児の親にも多世代交流を喜んでもらえる方が事業所としてもうれしいですね。

このようなことを踏まえて、開設する地域と連携する幼稚園や保育園を探していけばよいのではないのでしょうか。

Q 今後の江崎氏の課題や目標を教えてください。

A 多世代交流が大切とは言っても、デイサービスの特徴がそれだけでは利用者から選ばれる事業所になることはできません。やはり、それ以外の特徴も持つ必要があります。弊社では多世代交流のほかにも生活機能の維持・向上のため、洗濯・買い物・調理の支援も行っていますが、利用者や家族に大変喜ばれています。また、小規模デイサービスではありますが、柔道整復師による専門的なリハビリテーションも行っており、利用者のさまざまな要望にお応えすることができます。



こうした活動が実を結び、現在はデイサービスの稼働率も安定しています。現在、2店舗目の出店を考えており、そのほかにも入居施設の開設を検討しています。在宅の介護事業所を長年運営していると「利用者が老人ホームに入所することになり、デイサービスを利用することができなくなった」というケースも増えてきました。これは仕方がないことではありますが、「少しでも利用者の要望を叶えたい」という思いが年々強くなっています。とは

言え、私がイメージしている施設は老人ホームというよりは自宅に近いものです。私がかかわらせていただいている利用者は、自宅と思える生活環境を望まれている人が多いので、古民家風で入居者が落ち着けるような住まいの提供ができればと考えています。まだ少し先の話にはなりますが、目標が達成できるようこれからも励んで参ります。

● 共生型サービスを取り入れるだけでは意味がない

江崎氏のお話はいかがでしたか？ 2018年度の介護保険制度の改正で、サービス内容の見直しをするデイサービスも増えるはずですが、その中でも共生型サービスを取り入れる事業所は多いのではないのでしょうか。

既存の建物を生かした事業運営になるため、運営コストの削減につながる可能性は十分あります。しかし、同じ福祉サービスといっても、運営レベルで必要な知識は異なります。また、取り入れた共生型サービスによって利用者（高齢者や障害者など）や家族がどのように喜んでいただけるのか？ そうした特徴を見いだすことができないければ、新規利用者の確保にはつながらないでしょう。

事業者として決して忘れてはならないのは、「利用者や家族が求めているサービスを提供する」ということです。デイサービスで働いたことがある人には説明する必要もないかと思いますが、高齢者と子どもの交流がもたらす効果に疑いの余地はありません。ぜひ江崎氏の取り組みを参考にしながら、皆様も共生型サービスを取り入れてみてはいかがでしょうか。